



Justice & Vigor

発信：弁護士法人
シティサンライズ法律事務所
弁護士 浦田 益之
弁護士 和田 恵
弁護士 磯谷 太一
TEL 058-265-1708
✉ info@urata-law.com

これも一つの平和への道

1. 「御樋代木」(みひしろぎ)が岐阜市の金神社で一泊した。

初めてのことであり、大勢の人が集まった。

伊勢神宮のご神体を移す第63回「式年遷宮」は、2033年に行われる。

その準備のため、ご神体を納める器に使う用材(ご神体木)が、中津川市付知町の国有林で切り出され伊勢まで運ばれる。

中津川市付知町の山(裏木曾)と長野県上松町の山(木曾)から出る内宮、外宮、予備用の木3本ずつが別のルートになる。

岐阜県側は、2025年6月6日、付知町の護山神社をスタートして、瑞浪市、可児市、岐阜市、不破郡垂井町、羽島市、海津市を通ったうえ、桑名市で長野県側のご神木と合流する。

2. 式年遷宮は、690年、飛鳥時代の第41代持統天皇(女帝)によって始められ、20年ごとに繰り返されてきた。

その制度を定めたのは、夫の第40代天武天皇になる。

途中、戦国時代のことになるが、室町幕府の財政難から120年程中断されたことがあり、このとき、織田信秀、信長親子が伊勢神宮のため多額の献納を行った話は聞いたことがある。

ところで、実在したとされる最初の第10代崇神天皇の時代(紀元前?)に疫病が流行し、神と人との同居がよくないとされたことから、天照大神を祀る場所を皇居とは別の地に移すことになった。

その地として、内宮、外宮ともに伊勢市(五十鈴川のほとり)が選ばれたが、探すのに20年も要している。

皇女の豊鍬入姫命があちこちと探して回ることになったが、その一つに瑞穂市がある。

全部で15カ所もあったようだが、これが「元伊勢」と呼ばれ今では観光ルートになっている。

私も、2024年8月15日、その「伊久良河宮跡」を
尋ねている（写真参照）。



3. 式年遷宮は、他の神社でも行われたりする。

大阪市の住吉神社や京都市の加茂別雷神社が有名だ。

全国にはもっとたくさんの例があると思うが、我が郷里の、
和歌山県かつらぎ町の蟻通神社もその例に漏れない。

旧志富田（現渋田）の庄の総産土神として崇敬されているが、
子供のころは智恵の神といって教えられた。

20年に一度は、県外に出た者は何ほどかの寄付が求められ、
私もこれには協力してきた。

4. 20年を基準にしたのは、当時の寿命が40年とされていたからであろう。

式年遷宮は、神社や宮殿が一定の期間を目途にして、新しく建て替えられ、その場所にご
神体を遷す行事のことになるが、そこには、建築・工芸技術を含む日本の伝統文化を伝承
させる意味が込められていた。

神道に結びついた行事であり、神は常に清浄な場所で何もかも一新して祀るべきだとする
考えに基づく。

別の見方をすれば、時代は常に新しいものを求めて変化する、それによって「常若」なる
ものが永遠に保たれるという訳か。

そのことは、伊勢神宮の「最も古く、最も若く」の謳い文句にその趣旨がよく表れている。
平和でなければ続かない。

それと、これまでは遷宮にかかる経費は国が出していた。

政教分離の下ではできなくなったが、前回の伊勢神宮では、約550億円の経費がかかっ
ており、うち約220億円は国民の奉替金で賄われたとされる。

国民の中には、古来からの宗教としての神道や、天照大神を先祖とする皇室に対して距離
を置く一定数の人々がいるが（それも構わない）、1300年以上も続いた式年遷宮の仕来
りは、それはそれで、平和であるからこそできるイベントの意味を持っており、いつの世
までも続くことを願っている。

映画案内

「RENOIRルノワール」は、6月20日から公開されている。

第78回カンヌ国際映画祭のコンペティション部門で、2909作品中、メインコンペテ
ィションに選ばれた19作品の一つになる。

この映画は、フランス、シンガポール、フィリピン、インドネシア、日本の国際共同制作になり、岐阜市での撮影が全体の6割を占めている。
それだけに、岐阜市のフィルムコミッション部も力を入れて支援してくれている。

不完全な大人たちの孤独や痛みに触れながら、主人公のフキ（11歳）がひと夏を過ごして成長する様子を描いている。

早川千絵監督は、先に「PLAN 75」でカンヌ国際映画祭の「ある視点」部門（新人監督賞）を射止めており、今回は子供が大人になるのはどういうことかを探った内容になっている。

鑑賞する人によっては、受取り方が違ったりする（それが早川監督の狙いであったのかも知れない）。

時代設定は、1980年代の日本がバブル景気で浮かれていた時代になる。
ピエール＝オーギュスト・ルノワールは、クロード・モネと印象派を代表する画家であるが、本物でない絵を飾ってはそれだけで満足する時代や人々の様子を表すのに、これが映画のタイトルに使われている。

昭和の雰囲気が残っている地を必要としていたので、岐阜市をロケ地を選んでもらうべく、撮影監督になる二男の浦田秀穂を介して早川監督にプッシュした。

初めからカンヌ国際映画祭でノミネートされるのを狙って
取り組んだ作品だ。

世界40か国以上で上映される予定になっており、岐阜市が映画の聖地となり海外からの訪問者が増えることを期待している。



私にとって嬉しかったのは、何かと協力させてもらったことからか、映画のエンドロールに、Special Thanksとして、名前を表示してくれたことになる。

〔名言アラカルト〕

あの人がこんな言葉を残していた。

男は、結婚するとき、女が変わらないことを望む。

女は、結婚するとき、男が変わることを望む。

お互いに失望することを避けられない。

アルバート・アインシュタイン ドイツ生まれ 理論物理学者

ご仁の夫婦生活がどうであったかは知る由もないが、そう思われた時代も確かにあった。
離婚事件を扱っていると、今は、女が変わり、男は追い付かなくなってきた感がする。

済んだことにくよくよせぬこと
滅多なことに腹を立てぬこと
いつも現在を楽しむこと
とりわけ人を憎まぬこと
未来を神にまかせること

フォン・ゲーテ ドイツの詩人
劇作家

未来を神に任せるところまではいかないが、私の場合は、「一日一生」をモットーにしてきた。

それは、人間は暗いところばかり見つめていると、自らが暗い運を引き寄せることになり、人を誉め、いつも明るく振る舞っておれば、なぜか未来が開け運にも助けられるから不思議だ。

実際にも、明暗を分かる人生の例を多く見聞きしている。

平和の特使 岐阜市美江寺公園の戦災樹木イチョウ



岐阜新聞記事
戦災樹木は日本にしか存在しない。
どうしてか？

次回案内

岐阜放送「ぎふチャン」

浦田益之の言われてみれば… 8月27日（毎月第4水曜日午後4時5分から）